視覚障害者が受診しやすい環境を

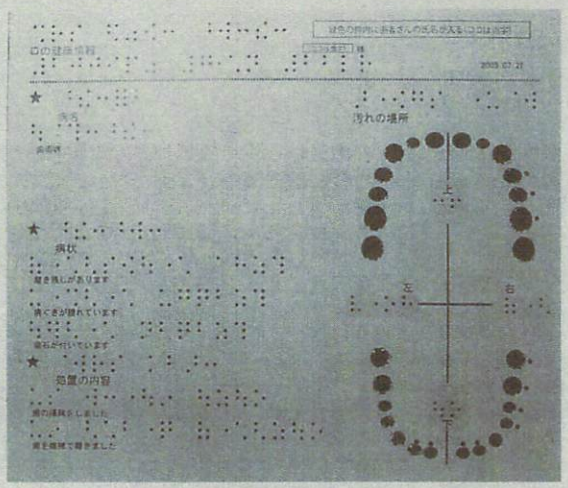
点字や触図で歯科治療説明

神戸大と大阪大がシステム開発

神戸大医学部（神戸市中央区）と大阪大歯学部（大阪府吹田市）のチームが、視覚障害者を支援するため、歯の病気、治療状況を点字や手で触れられる「触図」によって表現するシステムを開発した。従来はボランティアなど第三者による文書の説明が必要だった。既に阪大歯学部付属病院（森崎市治郎院長）で利用を開始。全国的に普及させ、視覚障害者が歯科を受診しやすい環境づくりに役立てたいという。

高岡裕准教授

視覚障害者は全国で31万人に上るともいわれる。神戸大医学部付属病院はこれまで、視覚障害者向けに医療文書の自動点字翻訳システム「イーブレイル」を開発。インターネットを使った点字の自習システム、触れることで行き先が分かる「触地図」のシステム作りも進めてきた。



デンタクトによる歯科診療の文書。左側に点字、右側は歯の形が立体化され、触れることで歯の状況が分かる

立体的に表現

今回は、障害者の歯科治療に力を入れる阪大から依頼を受け、共同研究を開始。イーブレイルに「歯質」など計1638の歯科用語を追加するなどし、開発を実現させた。

システムの名前は「デンタクト」。歯科医師が病名や病状、治療内容をパソコンに打ち込むと、自動で点字に翻訳され、歯垢（しこう）など汚れがある歯の場所を立体的に表現する触図ができる。印刷は立体コピー機を使用。利用者からは「分かりやすい」と好評を得ているという。日本デザイン振興会が主催する2013年度のグッドデザイン賞にも選ばれた。

法を先取り

今年6月に成立した障害者差別解消法では、大学病院などの公的機関に対し、障害者への配慮義務が定められ、16年4月に施行予定。米国や英国では法律に基づき、視覚障害者に対して障害がない人と同様の情報提供を保障している。

神戸大医学部付属病院医療情報部の高岡裕准教授は「法の成立で、障害者の情報格差を解消するシステムは一層必要となる。今後、障害者歯科を手掛ける大学病院などを中心に普及させたい」と話す。

（金井恒幸）

こ1人は、生涯に一度はがいわれる時代。経験者ならこ注目する人は、医療界のってきた。

当事者の気持ちを理解

「患者さんの気持ち、分かってなかったな」

1人の看護師の発言に、同席した何人もがうなずいた。東京で開かれた「サバイバーナースの会 ぴあナース」の研修会。青森から中縄まで、

橋け橋に

ことがあった。「なんて冷たい。声ぐらい掛けてくれても…」とうらめしく感じる一方、看護師が今はそっとしておこうと考えた可能性にも思い至った。

病気になって初めて気付い

東京で開いた研修会でお互いの体験を話し合う上原弘美さん（右から3人目）ら「ぴあナース」のメンバー

からだ

神戸のメーカー開発

がん転移検査法が保険適用

大腸がん、胃がんのリンパ節への転移を30分程度で検査できる方法が10月から、公的医療保険の適用になった。従来、精密な転移判定には手術後1週間ほどかかっていたことから、臨床検査機器メーカーのシスメックス（神戸市中央区）が開発。最適な切除範囲や治療法が選択でき、患者の体の負担軽減につながるという。

がんのリンパ節転移は通常、手術中や手術後に、摘出した組織から標本を作り、病理医が顕微鏡を使ってがん細胞の有無を確認していた。だが手術中は限られた時間での簡易判定となり、正確な判

属病院庶務課へ。同課☎06・6645711（平日9～17時）

【全人的統合医療に関する神戸ンポジウム】11月16日10時15分17時、神戸市中央区中山手通4、